

## 「巡回指導」を通して

教頭 三杉 賢太郎

私も文部科学省から在外教育施設派遣教員ということで、こちらに派遣されてから早いもので3年目となります。補習授業校における教頭の仕事は、「教員の資質の向上」ということで日本の学校における指導のノウハウを補習校の先生方に示し指導する、ということが主となりますが、他にも当然、ボストン日本語学校内外の仕事も行います。その中の一つに管内の派遣教員のいない他の補習授業校への「巡回指導」があります。

先日、Amherstにある、「アーモスト日本語補習校」へ巡回指導ということでお邪魔してきました。全校園児児童生徒42名という小規模校ならではのアットホームな雰囲気が感じられ、とてもほほえましく思いました。そこで小学部2年生7名に国語の授業をする機会をいただきました。

私：「みんなにクイズを出します。次の3つから選んでください。三杉先生が勤めるボストン日本語学校の小学2年生は何人いるでしょう。①みんなと同じ7人②17人③70人。」

子どもたちは、ほとんどの子が「①7人」を選びました。その他の子も「②17人」、70人を選んだ子は、誰もいませんでした。答えは約70人なので③なのですが、答えを言うと全員が「ええ〜っ！」と驚いていました。この規模は想像がつかなかったようです。そんな楽しいやり取りも交えながら、いよいよ授業へ。

日本語力に差のある子どもたち、という担任の先生からの話を伺っていたので、難しい内容は無理かな、と思いつつ、説明文の順序の並べ替えを行いました。子どもたちは自分たちで理由を見つけ、自分たちで確認しながら順序通りに並べ替えることができました。子どもたちの目は真剣そのもので、計画当初は、私自身そこにはあまり時間をかけないつもりだったのですが、子どもたちの熱心さに、途中から先に進めることよりも子どもたちの頑張りを優先させて授業を進めることにしました。



その後担任の先生から「読み取りが十分にできていて、カード作りの順序がよく分かっていたので、子どもたちもカードを2つも3つも楽しんで作っていました。」といううれしい連絡をいただきました。

日本では6時間で扱うこの単元を、補習校ではわずか1、2時間で進めなくてはなりません。時数の極端に少ない補習校では、このような進め方が命取りになりかねないのを知りつつ、子どもの頑張りを優先させたいジレンマ、これが補習授業校における授業の難しさ、また授業計画の難しさでもあります。私自身、今回は（も？）ちょっと「補習校の教員」としては、反省せねばならない部分があったなとも思いました。普段は先生方の授業を指導する立場でありながら、実際に授業を自分で行うと、気付かされるのが本当にたくさんあります。「巡回指導」はやはり私に毎年やってくる「修行」の場であり、自分の指導を振り返るよい勉強の場となっています。

本校が国から補助を受けるのは「教科書（日本国籍を有する義務教育分のみ無償）」「校舎借料の半分」「義務教育担当教員の給与の一部」、そして日本から派遣される校長・教頭、いわゆる「派遣教員」です。当然これだけのものを国から学校は支給・援助されているわけですから、この支給された教科書を授業で使いこなせるよう、私たちが担任の先生方に指導する義務を負うのは当然のことですが、この時数の少ない特殊な状況下で教科書を使いこなすのは、日本で何年も毎日教壇に立ってきた派遣である私たちにとってできえ、決して生易しいものではありません。そんな中で、指導のどこに力を入れればよいか、進度は大丈夫か、子どもたちは内容についてくることができるかなど、悩みながら毎週授業を進める補習校の先生方の頑張りには本当に頭が下がる思いであり、私のよき「ライバル」でもあります。



本校も他の補習校も、そして日本の学校できえもいろいろな各校の課題はあるにせよ、子どもたちが「分りたい」「できるようになりたい」「できるかぎり頑張りたい」という思いをもっているのは同じです。教壇に立つ以上、私たち教員はその思いに応える責任があります。それゆえ、私たち教員も子どもたち同様、常に「向上心」をもたねばなりません。

個別懇談が11月3日から行われています。保護者の方、子どもたち、担任の先生たち、それぞれの思い、願いが私のところにも毎日届きます。毎日の学習・指導を行う場は「家庭」、それを週1回でサポートする場は「補習校」。指導の定着がなかなか難しい環境の中で、それぞれが真剣に「学ぶ」ということに向き合っているのを、この時期はいつも以上に実感させられます。



私たちは、本校の文科省認定補習授業校としての「役割」と「責任」について、また「地域に根差したボストン日本語学校」について、これからも皆さんと絶えず考え続けていきます。

